

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

ママコンサルタントの初出張

2012年10月、2年3カ月ぶりの出張から帰国しました。行き先はネパール。開発コンサルタントとなって丸7年。年の半分以上、時には4分の3の期間を海外で過ごしましたが、妊娠・出産を経て海外出張から遠ざかっていました。

復帰後初出張にあたり、周囲の先輩ママコンサルの方々に、たくさんアドバイスをや経験談を聞かせていただきました。「小さい子でもちゃんと理解するから、事前に説明しておくこと」「カレンダーにシールを貼ると子どもにも出張期間がわかる」「出張期間分の食事を作り置きして出かけた」など…。夫や実家の親とは普段から協力して育児をしています、引き継ぎ事項（食事、保育園の送り迎えや持ち物、病気になった場合など）を書き出してみると、仕事の引き継ぎよりずっと長くなりました。それでも「成田まで来ると、心配しても仕方ないという気になる」と聞いたとおりの心境で、現地へ向かいました。

出張中に訪問したある保健所で、生後3カ月の赤ちゃんの三種混合の予防接種に立ち会いました。ネパールの赤ちゃんも、自分の子と同じ接種時期に同じワクチンを接種しているという当たり前のことに、不思議なつながりを感じました。ただ、学校や道端で小さな子を見ても思いのほか感傷的になることはなく、頭が仕事モードに切り替わっていたようです。家事育児のある普段と違って出張中は必要なだけ仕事に集中することができました。いつもの出張グッズを忘れたり、手間取ることもありましたが、意外とあっさり出張になじんだように思います。

これからはしばらくの間、長期出張で現場に張り付くことはできなくなります。それでも、駆け出しの5年間にJICAや複数省庁の多様なタイプの案件に従事し、アフリカの田舎の農村から中央省庁まで様々な現場を経験したことを頼りに、国内中心、短期のみの出張であっても、「現場の事情や苦勞のわかっていない人」にならずにいたいと思っています。

IDCJの研究員は、裁量労働制の下で出社の有無や時間を自由に決められるため、育児をしながらでも働きやすい環境ですが、成果はこれまでと同じように求められる厳しさもあります。国内に仕事があるか心配していたのが嘘のように、引き受けすぎて睡眠時間が大きく減ったという反省もあります（復帰1年目はそうなる人が多いそうです）。

仕事と育児の両立も出張も、うわさ通りに大変でした。保育所のアベイラビリティの問題や出張期間中だけ延長保育を利用できるようにしてほしい、夫の会社（日本の普通の中小企業）も柔軟



ネパールの学校の幼児クラスの子供たち

な働き方ができるようにしてほしいなど、希望を挙げればきりがありません。それでも、支えてくれる家族や職場の方々、そして苦勞を共にする社内外の頼もしい先輩・友人の存在があれば、ハッピーに頑張ることができます。開発コンサルタント業界では最近、ママコンサルのネットワークをつくる取り組みがあるとも聞いており、期待しています。

また、仕事と育児の両立が注目されがちですが、開発コンサルタントにとって、妊娠自体が大きなハードルだと感じています。出張が多く妊娠する機会を得にくい、妊娠すると団員交代など関係者に迷惑をかける、妊娠する可能性があっても新しい案件に入らない訳にかかわらず悩む、といった点です。センシティブな問題ですが、業界全体が前向きに、柔軟に対応できる雰囲気であればと願います。将来的には、子どもの有無にかかわらず、開発コンサルタントが出張をこなしながらも、それぞれが必要なタイミングでプライベートと仕事のバランスをうまくとることができるような職業になればと願っています。

帰国すると、1歳8カ月の娘は何も言わず抱きついてくれました。「1歳では目の前にいない母親のことは忘れてしまう」と聞き、覚悟していたので、嬉しくもあり、忘れて楽しく過ごした方が楽だったかもしれないと複雑な思いもしました。いつか先輩に聞いたように、この瞬間のことは一生忘れられない気がしています。（文責：国際開発センター研究員 高杉真奈）